

「うつせみ」私考

——葉研究ノート——

山 根 賢 吉

樋口一葉の「うつせみ」は、同年に発表された「たけくらべ」「にこりえ」「十三夜」などにくらべてとり上げられることの少ない作品である。言わば名作の蔭にかくれた作品である。しかしそれはこの作品が何ら問題のない作品ということではない。以下この作品について私見を述べることにしたい。

「うつせみ」は関如來の依頼に応じて執筆され、明治二十八年八月二十七日から三十一日にわたって読売新聞に連載された。一葉にとって明治二十五年十月の「経つくえ」以来久しぶりの新聞小説であった。のち一葉歿後「文芸倶楽部」第三卷第二編臨時増刊「第二園秀小説」(明治30年1月)に再掲されたが、句読点、ルビの異同等が認められるものの、本文上大きな相違はない。その梗概は、「全集樋口一葉 第二卷小説編二」(昭和54

年10月刊 小学館)によれば次の通りである。

ある夏の夕べ、小石川植物園の近く、木立ちが深く庭の広い閑静な貸家に、一人の若い女性が女中に抱えられるようにしてやって来た。彼女は三番町にある名家の一人娘で雪子という十八歳の美しい女性だったが、気が狂い、下僕の川村太吉の世話で貸家を転々として養生しているのであった。

老いた父母や、養子で許婚者の正雄が新しい養生先へやって来て看病するが、雪子は取り留めのないことを百ったりして彼らを喚かせる。その中でもしきりに「植村さん」「ゆるし給へ」「罪」「おあとから行きます」などと繰返し、彼らをはらはらさせるのである。

そんな雪子をいたわしく思う太吉や女中のお倉やお三どの話からすると、雪子が学校に通っていた頃、美しい彼女に恋した男がいたらしい。その男は植村録郎という名で、彼女に許婚者がいることを知らずにひたむきに彼女を恋したようだ。そして、その結果、自殺をして果てたらしい。雪子が罪の意識から狂っていったのは、それが原因となっているらしく、お倉たちは「浮世はつらいもの」と同情するのであった。

八月中旬から雪子の狂気は激しくなり、泣く声ばかり昼夜に絶えないが、それもしだいに細々と弱り消えていくようである。

右の文中に、「恋した男がいたらしい」とか「恋したようだ」とか「自殺をして果てたらしい」、あるいは「原因となっているらしく、」などと、あいまいな表現が見られるのは、「うつせみ」そのものがあいまいさを残しているからである。それは一面ではこの作品の未熟さを物語っていると、他面、一葉にとつてひさびさの新聞小説の執筆ということで、読者の興味を持続させるために、ことさらあいまいなものを残しつつ書き進めていったというきらいがないではない。

特にこの小説のあいまいさは登場人物間の関係に見られ、(一)

で「小石川植物園にちかく物静」かなる家を借りにきた「四十に近かるべきそ、くさと落つきの無き」男を先ず描き出し、次に早速この家に移ってきた「三十許の気の利きし女中風」と、主人公たる「十八か、九には未だと思はる、やうの病美人」を描き、ついで夜に入って到着した「一人は六十に近かるべき人品よき剃髪の老人、一人は妻なるべし対するほどの年輩」の女を出し、更に翌朝この家に戻ってきた「三十位のてつぷりと太て見だてよき人」、「お三どん」が「番町の旦那様」と呼ぶ男を描いている。老人夫婦は「病美人」の父母と推定されており、「そくき男」は「川村太吉」という名で、老夫婦の従僕とでも言うべき男と推測されるが、この「番町の旦那様」の正体はさっぱりわからない。(二)になると、「病美人」の「病」は精神的な病であり、それもよほど大きなショックによるらしいことがうかがわれ、更に彼女の口について「貴君」とか「兄様」ということが出てくる。これらが誰をさすのかは次の(三)にならないとわからない。すなわち、(三)になると、「兄様」は(一)に登場した「番町の旦那様」であり、「貴君」は「植村録郎」という名であるらしく、また「病美人」は「雪子」という名であることが判明する。(四)では、「兄様」は「正雄」という名であることがわかり、その兄様の「植村の事は今更取かへされぬ

事であるから、跡でも想に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向けば、彼れは快よく瞑する事が出来ると遺書にも有つたと云ふでは無いか。」ということばから、植村は自殺したものと考えられる。また「兄様」は雪子の実兄ではなく、許婚者であるらしいことが暗示されている。(五)では、「お三どん」の口を借りて、植村が許婚者のある雪子を恋したがために自殺し、それに衝撃を受けた雪子が狂乱に至ったことが語られる。以上のように回を追うにつれて作者は種明しをしつつ、読者の興味をつなごうとしているのである。しかし、最終の(五)に至っても、肝心の雪子と植村との関係は判然としない部分を残している。和田芳恵氏は(四)で、植村を「校内一流の人」としている点について、

「たけくらべ」の(一)の最後に「今は校内一人の人」と藤本借如のことを書いてある。一葉の理想の男性ということになるか。当時の学制では中等学校以上は共学ではなく、

また、正雄と録郎は学校がちがうように読みとれるから、おそらく、録郎と雪子は小学校のおさななじみであろう。また、録郎が正雄よりもすぐれた存在であると思われるように書きあらわされている。親がきめたいいなすけに雪子がしばられなかつたら、録郎と結婚するつもりだったのだ

ろう。

と注をつけておられる(『日本近代文学大系8 樋口一葉集』昭和45年9月 角川書店)。ここでは「録郎と雪子は小学校のおさなじみであろう。」という推定がなされている。恐らくこれを受けて、前掲『全葉樋口一葉第二巻小説編二(小学館)の注でも「雪子と植村とは同じ小学校に学んだものであろう」と記されている。ところが、雪子と植村についてはもう一つの見方がある。それは「うつせみ」が「文芸倶楽部」(明治30年1月)に再掲された後の最も早い反響ともいうべき「めさまし草」(明治30年2月)の「雲中語」で、

頭取 三番町の名ある家の娘、学校教師植村録郎のおのれに夫となるべき正雄といふ人あるを知らずして恋ひ慕ひ、その望を失へると共に世を憤りて自殺せしより発狂せる話を、一葉の書きつるなり。

とある注目すべき指摘である。「雲中語」では、植村と雪子は師弟関係であったとするのである。この系列に属するものとして、長谷川時雨の『評釈一葉小説全集(昭和13年8月 富山房)』の解説がある。そこには、

その(注 雪子の)美しい姿が、植村録郎という、多分学校の先生でもあつたらう有為の青年を殺してしまふこと

になつたので、その遺書を見てから、娘は気が狂い出したのだ。

という一節がある。(「一葉小説全集」附巻口宝文館による)

植村と雪子が幼馴染なのか、師弟関係なのか、たしかにこの作品は決め手を欠いている。しかし、(一)で雪子と母親との対話の中で、

あの夫れ一昨年のお花見の時ねと言ひ出す、何と受けて聞けば学校の庭は奇麗でしたねへとて面しろさうに笑ふ、あの時貴君が下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてありまする、奇麗な花でしたけれど最う萎れて仕舞ました、とあり、(五)の冒頭では、

雪子が繰かへす旨の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前も其前も、更に異なる事をば旨はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと旨ふ旨葉、学校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、恋しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此処に心はもぬけの光になりたれば……

とあつて、植村と学校とが密接な関係にあることは容易にうかがわれる。雪子はその学校の庭で植村に花をもらったと言ふ。それは恐らく、今も雪子の頭に鮮明に残っている過去の事実と

考えてよく、現在十八歳かと思われる彼女が一昨年のこととして回想しているのであるから、女学校時代と考えるのが自然であろう。とすれば、植村はやはり雪子の師ととるのが妥当であり、(五)でお手伝いが、植村について「学問はまらからうとも」とあるのは(四)の「校内一流の人」とともに、植村が教師であることを暗示しているように思われる。更にこれを裏づけるものとして「うつせみ未定稿Ⅶ」(「樋口一葉全集 第一巻」昭和49年3月 筑摩書房)の次の一節をあげることができる。

雪消て梅の花わらひ初る今歳の春も二月の末まで、山の手の去る女学校に英学うけ持の教師ありける、年わかなれども品行のよきにおのづから生徒のうけもよく、家に迎へて教を受けたしといふも有り、一人住の門をたいて書物か、えて出入るもありけれど、人見ゆるし咎むるもなきは、いかに無骨の名に立けらし、

以下、筆はこの男の風采・容貌などに及ぶわけだが、未定稿がそのまま定稿につながらぬとしても、植村録郎の原型がここにあることは、右の文のややあとで、

色の黒きこと天然にはあらで淡ぬりの如く

とある部分で、「うつせみ」(五)で、植村についての「お三どん」のことは

何があの色の黒い無骨らしきお方、学問はえらからうとも
何うで此方のお嬢さまが村にはならぬ

と類似していることも、未定稿の教師と植村との関連を予想させる。

およそ小説において、その中心となる人物関係が判然とせず、あちらこちらの表現からようやく推定できるということ自体、失敗作たるを物語っているわけであるが、その原因の一端は、作者が新聞小説ということを意識し過ぎたためとも思われる。

すなわち雪子の狂気の原因を読者に次第に明らかにしようと思つたが、結局人間関係そのものがあいまいになって、狂気の原因も、すくなくとも一読しただけでは把握し難いものにしてしまったように思われる。他方、この作品が、「めさまし草」の「雲中語」に、

真面目。日就社の急なる請に應じて書きしものと聞きつ。
とか、妹邦子の「かきあつめ」の明治二十八年の項に

秋説うりより俄にたのまれて、うつつせみはいだす

とかあるように、この作が忽卒の間に成ったものであったことも失敗の一因であったかと思われる。その他、この作が、未だ一葉の手がけたことのない精神障害者を主人公としたことも、その一因をなしたかも知れない。

さて、「うつつせみ」のモデルについては、この作品をとりあげ
る場合、必ずと言ってよいほど引用される次の馬場孤蝶の回想
がある（「一葉全集後編」明治45年6月 博文館所収「一葉全集
の末」）。

二十八年の秋かと思はれるのだが、一葉君の北隣りに越し
て来た一家に若い狂女があった。時時一葉君の家の土間へ
入つて来て、坐わつて了まつて何うしても動か無い。英語
を挟んで取り留まらぬことを高声でしゃべつた。娘の母親
が「お前が左様な風だと両親の耻になるのだから」と諭す
と、娘は奮然として、「イ、エ、私は貴方がたに耻をか、せ
やうと思つて斯うするのです」と叫んだといふのだが、「う
つつせみ」の材料はそれから得たのであらう。

このように、「うつつせみ」の素材は作者の身近にあつたとしても
も、この作品は意外に一葉初期の作品に類似する点が認められ
る。すでに「樋口一葉全集第一巻（前出）の補注に

「うつつせみ」の成立事情は「経つくえ」にまで溯らなけ
ればならない。起稿に先立って、二十八年五月下旬に、再
掲のために「経つくえ」が改訂されている。未定稿によれ
ば、植村録郎は雪子の教師である。波崎学士（再掲本文で
は「松島忠雄」を嫌いつづけて、学士の病死後はじめて愛

を覚え、それを守りつけて独栖^{ひとりび}する香月園が、雪子の原形である。VIでは、明らかに「経つくえ」の一部が活用されている。

と記されている。右の文中の「VI」は、先に一部を引用した「うつせみ未定稿VI」で、特に、「一人住の門をた、いて書物か、えて出入る」というあたりに「経つくえ」の一部が活用されているとするのである。たしかに「うつせみ」は「経つくえ」と関連しているであろう。前述のように、「うつせみ」は「経つくえ」以来の新聞小説であり、しかも右の「補注」が指摘しているように、「うつせみ」執筆に先立って「経つくえ」の改訂がなされている点を考えても、両者の関連は十分考えられるところである。更に「うつせみ」の終末部分

空鐘はからを見つ、もなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞えずもがな。

と、古歌を引きつつ結ぶ手法は、その先蹤を「経つくえ」の結び、

「ある時はありのすさびに憎くかりき無くてぞ人は恋しかりける」とにも角にも意地わるの世や意地悪るの世や。に求めることができる。

しかし、「うつせみ」が関連をもつのは「経つくえ」だけでは

ない。「うつせみ」の女主人公の印象的な描写に、

顔にも手にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白きがいたましく見えて (一)

黒く多き髪の毛を最惜^たしげもなく引つめて、銀杏返しのはれたるやうに折返し折返し鬢形に登みたるが、大方横に成りて狼籍の姿なれども、幽霊のやうに細く白き手を二つ重ねて (三)

などがあるが、この種の描写の先蹤として、「間桜」のお千代の一日ばかりの程に瘦せも瘦せたり片鬢あいらしかりし頬の肉いたく落ちて白きおもてはいと透き通る程に散りかかる幾筋の黒髮緑は元の緑ながら油けもなきいたくしきよ (下)

とある部分をあげることができる。いずれも恋ゆえに病み衰えた若き女人の姿であり、病臥する若き美女と枕頭に侍る肉親・知己という構図は、一葉の処女作とも言うべき「間桜」においてすでに試みられているところなのである。また、先に引いた「うつせみ」の結末「あはれ門なる柳に秋風のおと聞えずもがな」に女主人公の死の近きを暗示しているように、「間桜」の結末も

風もなき軒端の桜ほろ／＼とこぼれて夕やみの空鐘の音か

なし

に女主人公の死を暗示しているのである。

また、「うつせみ」は、雪子という一人の美女をめぐる正雄と録郎の物語、すなわち、二人の男の愛の板挟みになった女の物語と考えることができるが、こういう型は、すでに「たま櫛」に見られるところで、青柳糸子をめぐる松野雪三と竹村緑との物語は、結局は糸子の自殺によって終るのだが、もし糸子が自殺を選ぶことなく、狂気に至ったとすれば、そこに「うつせみ」の世界は始まるであろう。「うつせみ」の雪子と「たま櫛」の雪三、「うつせみ」の植村録郎と「たま櫛」の竹村緑という名付け方の類似もあって、一層両者の類縁を想像させる。筆者はかつて「たま櫛」の源として露伴の「対顔籠」を指摘したことがある（『樋口一葉の文学』昭和51年9月 桜楓社 所収「一葉初期小説覚え書」）が、相手から恋され求婚され、それを拒絶することによって相手を不幸に陥れる。ところが、それを機縁として、自ら恋の焰に身を焼くという女人像は、やはり「対顔籠」あたりから発していると見てよいのではなからうか。筆者は「うつせみ」の源として「たま櫛」とともに「対顔籠」をも連想せざるを得ない。

また、師弟関係という点では「経つくえ」とともに「雪の日」

をあげることができる。「雪の日」の主人公も不幸であったが、「うつせみ」の主人公は悲慘である。

以上、「うつせみ」は恋のために病む女性を描いたという点、結末で自然の風物を借りて死を暗示している点において「闇桜」に、三角関係の物語である点において「たま櫛」に、師弟関係という点において「経つくえ」ならびに「雪の日」にそれぞれ類似していると言える。

しかし、「うつせみ」は単なる一葉初期の小説の延長ではない。すでに「校内一流の人」から「たけくらべ」の信如が連想されていることは既述したところであるが、「にこりえ」において「三代伝はつての出来そこね（六）」というお力は、七つの年の出来事を回想し「私は其頃から気が狂つたのでござんす」（同）と旨い、盆の十六日、夜店の並ぶ小路を歩きつつ、

行かよふ人の顔小さく／＼擦れ違ふ人の顔さへも遙とほくに見るやうに思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや／＼といふ声は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の声は、人の声、我が考へは考へと別々に成りて、更に何事にも気のまぎれる物なく、人立おびたゞしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは広野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる

物もなく、気にかゝる景色にも覚えぬは、我れながら酷く逆上^{サカシ}て人心のないのにと覺束なく、気が狂ひはせぬかと立とまる途端、

と狂気寸前の自分を意識するが、この部分には、すでに和田芳恵氏（前出）『日本近代文学大系8 樋口一葉集』や岡保生氏（前出）『全集樋口一葉第二巻小説編二』の指摘されているように、「うつせみ」の

家の中をば広き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ（五）

と共通するものがあり、また先に引いた植村についての「色の黒い無骨らしきお方」という点は、これまた岡氏（前掲書）の指摘があるように、「にこりえ」の源七が「色の黒い背の高い不動さまの名代」三と記されている点と共通し、かの「そくさ男」の名が太吉である点は、「にこりえ」の源七の息子の名と一致する。

また、病床にある雪子のことばや人々の雪子についてのことばに、

父様も母様も兄様も誰れも後生顔を見せて下さるな。（二）
兎角に誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる。（三）
後の事はお前の心に任せるから思ふまゝ、の世を経るが宜い

（四）

などとあるのは、「たけくらべ」二十五で、小座敷に横たわる美登利の、

成事ならば薄暗き部屋のうちに誰れとて言葉をかけもせず
我が顔ながむる者なしに一人気まゝの朝夕を経たや（中略）
「物いひかければ悉く蹴ちらして、（中略）誰れもく私の処へ来ては厭やなれば、お前も何卒帰つて、

という心情や行動に通ずるところがある。「たけくらべ」二十五の執筆は、「うつせみ」完成以後と推定されるから、「病人」雪子の描写は、横臥する美登利の描写へと展開して行ったとも考えられる。ただし、その源は「闇桜」のお千代の病床の場面にあることは前述した通りである。

以上のように、一葉の「うつせみ」は、初期作品の一面を継承しつつも、他面「にこりえ」「たけくらべ」など後期の作品に通じる点も認められる。言わば、初期と後期の接点をなす作品とも言えるわけであり、また一葉が狂気に迫ろうとしたという点でも特色のある作品と言えらう。しかしその狂気の原因を十分に描き得ず、人物関係にまいまいなものを残す結果になった。そこに「うつせみ」失敗の理由があるのは事実だが、この作品には、たとえば、

夫でも母様私は何処へか行くので御座りませう、あれ彼方に迎ひの車が来て居ます、とて指さすを見れば軒端のうちの木に大いなる蛛の巣のかゝりて、朝日にかゞやきて金色の光ある物なりける。(二)

とあるような、きらりと光る部分があることも見落してはならないであらう。